

私の茶道

1/2

マーカス・ベルンリ齊藤

翻訳：齊藤由香

2月18日2008年

<http://momentarium.org/research/independent/tea.shtml>

私が2002年に日本へ行き、京都での生活を始めたとき、この都市には日本の文化と伝統が今でもとても根強く残っていると感じました。そして私のそれまでの早いテンポの日常生活の中に、どうやってこの深い文化を取り入れることができるだろうか、と考えました。私は自分がどこに住んでいても、日本とのつながりを感じることができるような何かをしたいと思いました。



そこで私の友人が、京都の小さな茶道教室の先生である尾花先生を紹介してくれました。2、3回そのクラスに出席した後、彼は私が日本にとどまるのに必要な文化活動ビザの取得に力をかけてくれることになりました。そしてそのまま私は彼の教義がどのようなものかも分らないまま、裏千家の流派の一つである宋宙流の生徒になりました。後から分ったことですが、尾花先生の教義は、彼の茶室は完全に安全な空間で、そこでは生徒は何度間違ってもかまわない。間違ふことから学ぶことができる、という事でした。



最近では、他の流派の人たちと会うたびに、自分がこの小さな裏千家の流派に属していて良かったとあらためて思います。なぜなら、お茶会での作法はそれぞれの流派によって少しずつ違いがあるため、尾花流のような小さな流派はそれを知っている茶人は少なく、例えば私が作法を間違ったとしても他の人にはそれが分からないからです。また裏千家と表千家の違いについては、あまり厳しく分けるべきではないと私は考えています。なぜなら茶の湯とは、

そもそも現実の世界の身分制度を離れて、全ての人が平等にお茶を楽しむというものだからです。

その後4年にわたって、私はほとんど毎週お茶の稽古に行きました。もちろん、多くの細かく厳しい作法と何時間も正座をして足が痛くなること、学んだはずの重要な作法をすぐに忘れてしまうことで、何度もお茶のお稽古をやめようと思いました。けれども、結局は4年間の間ずっと稽古を続けることになりました。それは茶の湯が、インテリア・デザイン、活け

私の茶道

2/2

マーカス・ベルンリ齊藤

花、着物、お茶とお菓子といった、それぞれに異なる芸術が
出会う交差点であり、日本の家文化を象徴する素晴らしい、
生きた芸術作品であると考えたからです。



茶道の正しい作法を稽古する事は、誰もがその所作の中で
自分自身を表現する方法を見つけていくという事だ、という
事を理解するまでには何年もかかりました。もしあなたが
経験豊かな『お茶人』がお茶をたてているのを見れば、
彼や彼女の所作のなかに、他の誰とも違う彼ら自身の優美な
スタイルを見ることができると思います。それは彼らが稽古を
重ねて技術に熟達したあと、それぞれに個人的な要素を加
えて、より自由にお茶を表現しているからです。その点で、
茶道は人生を通じての旅のようなものであり、季節の移り
変わりや私たちが年(とし)をとっていくごとに、さまざま
に違う意味をもたらすといえます。

私にもう少し自信がついて、200ちよつとある所作の全て
を上手にできるようになったら、いつかどこかの閑静なお
茶室でお茶会を開きたいと思っていました。多くの伝統芸
術の共通点の一つは、それが現代の都市生活から遠く切り
離されているように見えるということです。奇妙に聞こえる
かもしれませんが、茶道の始まった当初は、今の茶道とは
違い、茶道が何か特別で高級なものである、というような
感覚はありませんでした。茶の湯は日常的な家文化の一
部であり、時には公園でピクニックのようなかたちでお茶
を楽しむこともありました。



そこで2006年秋に、私はこのもともとの茶の湯のコンセプトにしたがって、
京都と函館の公共の場所でお茶をたてて道ゆく人たちにお茶を差し上げる
というイベントを行いました。毎週、ちよつと変わったビックリするよ
うな場所に即席のお茶席をもうけ、通りかかった人たちに無料でお茶
をたてました。これは単にお茶をサービスするというだけではなく、
空間や時間、場といったものの公共性が、私たちがどのように繋げあ
うことができるのかという、公共性についてのより自由で広がりのある
考えを人びとに伝えるというメッセージを持っていました。